

|                    |      |     |    |    |
|--------------------|------|-----|----|----|
| 文化人類学A(2)<br>大谷 裕文 | 履修年次 | クラス | 単位 | 学期 |
|                    | 2-4  |     | 2  | 前期 |
| 備考：                |      |     |    |    |

### 【講義の概要】

昨年、私たちが経験した未曾有の災厄（東日本大震災）以後、「来るべき未来」、「これからの世界」、「将来への展望」、「自然エネルギー社会に向かって」等々、現状を反省・再検討し、近未来像を模索する言説が急速に増えていきました。こういった現在の日本のトランジション（過渡的状況）を踏まえて、文化人類学という学問がどのように「より良い近未来社会」の探求に貢献することが出来るのかという視座に基づいて、毎回の授業を展開していきたいと思っています。特に、約15万年前に誕生した現生人類がどのように文化（プロメテウスの火）を獲得し、今日に至るまでどのようにそれを利用してきたのかという問題、およびどのようにマリノフスキーやマルセル・モースが取り組んだ互酬性の問題を発展させていくことが出来るのかという問題には、重要課題として力を入れて取り組みたいと思います。毎回の授業内容は次の通りです。

- 第1回 人類15万年の歴史と文化の獲得
- 第2回 神話の発明と生態圏文化環境の形成
- 第3回 近代化の進展と文化人類学の成立
- 第4回 進化人類学から機能主義人類学へ
- 第5回 マリノフスキーのクラ研究
- 第6回 マルセル・モースの互酬性研究とその後の展開
- 第7回 アメリカ文化人類学の生成と発展
- 第8回 フランス構造主義人類学の成立
- 第9回 レヴィ＝ストロースの神話研究の今日的意義
- 第10回 ポスト構造主義の展開（1）～ポストモダニズム
- 第11回 ポスト構造主義の展開（2）～カルチュラル・スタディーズ
- 第12回 ポスト構造主義の展開（3）～グローバル化論
- 第13回 エネルギー利用逸脱の人類社会へのインパクト（1）
- 第14回 エネルギー利用逸脱の人類社会へのインパクト（2）
- 第15回 近未来の新互酬性社会に向けて

### 【テキスト】

テキストは特に使用しない。

### 【参考書等】

中沢新一、2011年『日本の大転換』、岩波書店

### 【成績評価の方法】

学期末試験の成績によって評価をおこなう。

### 【履修上の注意】

参考書として指定している中沢新一の著作を図書館などで熟読し、その内容をよく理解しておくことが望ましい。